

高校運動部活動におけるリスクテイキング行動の要因

―選手は、なぜ怪我をおしてまで試合に出場するのか―

Factors of Risk-Taking Behavior for High School Athletes

―Why Athletes Continue Participating Games with Severe Injuries―

スポーツクラブマネジメントコース

5016A305-4 小勝 健司

研究指導教員：間野 義之 教授

1 序論

(独) 日本スポーツ振興センターの報告では、高等学校の課外指導時の「負傷・疾病におけるスポーツ傷害」の発症率は58.5%とされ、半数以上を超えている。また、突然死や頭頸部外傷による死亡・重大傷害に関しては、徐々に減少傾向にあるが、依然毎年発生している状況にある。運動部活動別に傷害発生件数をみると、野球部、サッカー部、バスケットボール部の順で多く、発生率では、ラグビー部が特に高いことが報告されている。運動部活動は、教育的側面と競技的側面の役割を果たしてきた。しかし、全国大会などの盛り上がりとともに、怪我を抱えながら大会に出場する選手の報道はあつと絶たない。結果、選手生命を短くなったケース、大会後に手術をするといったケースも少なくない。運動部活動では、傷害知識の少ない指導者による指導や医師を無視した選手の勝手な競技復帰などの報告もあり、多くがスポーツ傷害を経験し、怪我を抱えながらプレーを続けている実態が明らかになっている。

1.1 先行研究

スポーツ傷害では、Bahr et al. (2005)によるスポーツ傷害のリスクファクターモデルを中心に研究されてきた。その後、スポーツ傷害が発症する心理的要因や心理社会的要因が注目されるようになった。受傷選手の心理的反応や個人的、状況的要因を考慮した「認知評価モデル」として、Wiese-Bjornstal, D.N. et al. (1998)により「スポーツ傷害とリハビリテーション過程に対する心理的反応の統合モデル」が作成された。

事故や労働災害の2大原因に「ヒューマンエラー」と「リスクテイキング (不安全) 行動」があるといわれている。芳賀 (1999) は、「リスクテイキングに至るプロセス」を示し、リスクの知覚 (危険の気づき) のもとにリスクテイキング行動が意思決定されるとした。蓮花 (2000) は、運転時のリスクテイキング行動の過程から、「リスクテイキングのメカニズムとリスク回避行動へのアプローチ」を示し、リスクテイキング行動が回避行動の選択かは、その個人の行動環境や社会的

状況に大きく依存するとした。リスクが高く評価されたとしても、「ベネフィット (効用)」が上回れば、リスクが受容されリスクテイキング行動が生じやすい。

これまで、怪我をおしてまで試合に出場する、というスポーツ分野におけるリスクテイキング行動に関する研究を見ることができない。スポーツ事故も産業事故と同様に捉えるならば、「リスクテイキング (不安全) 行動」を防止しない限り、スポーツ安全は成し得ないのではないか。これまでの産業事故領域に関する知見の蓄積を、スポーツ分野に着目し検討してゆくことは意義深いと考えた。

1.2 研究の目的

選手は、なぜ怪我をおしてまで試合に出場するのか、高校運動部活動におけるリスクテイキング行動の要因を明らかにすることを本研究の目的とした。

2 研究方法

2.1 調査対象者

高校時に怪我をおして試合に出場した経験を持つ、現在大学の体育会運動部に所属する男子選手とした。野球、サッカー、バスケットボール、ラグビー、柔道の5つの競技志向の強い運動部活動から、各2名ずつ計10名とした。

2.2 データ収集

1対1の半構造化インタビューを行い、ICボイスレコーダーにて録音し、随時、逐語録を作成した。インタビューは、1人に対して約1時間程度実施した。

2.3 分析方法

テキストデータから川喜田二郎によるKJ法を用いて分析を行った。

3 結果

本研究では、選手個人や選手との関わりのある社会的環境の中から、怪我をおしてまで試合に出場する要因に関連している文脈を対象に分析を行った。その結果、357のコードが抽出され、48の概念が生成された。さらに19カテゴリーの集約し、最終的に【競技に関連する認識】、【怪我に関連する認識】、【個人的気質】、【指導者の影響】、【指導者以外の他者の影響】、

【大会までの時間】の6のメインカテゴリーとして分類された。メインカテゴリーの性質から《個人的要因》、《対人的要因》、《時間的要因》に分類された。

4 考察

4.1 個人的要因

〈試合出場への強い意志〉、〈最後の年にかかる想い〉、〈メンバー入りへの強い意志〉、〈目標達成意欲〉、〈勝利への意欲〉、〈自分への期待〉などからなる『試合出場動機』は、競技志向の選手の性質である。また、小さい頃からの夢である〈全国大会出場への想い〉となる『全国大会への憧れ』や運動部活動に多くのエネルギーを注ぐ〈競技への傾倒〉、〈競技からの学び〉などの『競技への価値観』によって構成された【競技に関連する認識】は、試合に出場するという「ベネフィット（効用）」を認知することにより、リスクテイキング行動に影響することが示唆される。

〈怪我への知識不足〉、〈過去の経験による出場の自信〉、〈練習参加可否の自己判断〉、〈専門機関への未受診〉、〈他の受傷部位との比較による出場判断〉による『怪我への認識』や、競技毎に内在する〈競技特有の怪我に対する認識〉からなる『競技特性による怪我の認識』、選手の『痛みの軽減』という認知、などから構成された選手個人における【怪我に関連する認識】は、怪我というリスク認知を低減させることにより、リスクテイキング行動に影響を及ぼすことが示唆される。〈役職ある立場の責任〉、〈中心選手としての自覚〉からなる『責任感』を認知することでリスクテイキングを、〈自暴自棄な心境〉からなる『自暴自棄』は、指導者との関係によるリスク回避行動として、これらの【個人的気質】は、リスクテイキング行動の影響に関わることが示唆される。

4.2 対人的要因

指導者の合意や指示で選手の試合出場可能となるため、〈指導者による出場判断〉、〈監督による強制〉、〈出場条件の提示〉などの『指導者の試合出場への対応』は、リスクテイキング行動に関わる要因として、〈監督との信頼関係〉を高めたい、〈指導者との不良な人間関係〉から怪我の情報を伝えない、叱咤というリスク回避から〈先生の指示への追従〉するなどからなる『指導者との対人関係』、さらに〈指導者の性格〉、〈指導者の休むことへの圧力〉、〈監督による放任〉、〈受診の未指示〉、〈怪我の対応の未指示〉、〈怪我に対する監督の指示〉、〈絶対的な先生の存在〉などからなる『指導者による場の雰囲気』は、怪我しても休みづらい部活動が示唆される。〈監督の出場への期待〉、〈監督からの励まし〉、〈トレーナーからの励まし〉などによる『指導者によるサポート』は、

指導者の期待に応えたい「ベネフィット（効用）」を促進させ、また〈信頼できるトレーナーの不在〉からなる『相談できる指導者の不在』はリスク認知を低減させることが示唆され、これらの【指導者の影響】はリスクテイキングの要因として考察される。〈チーム内における重要な立場〉における貢献度、〈メンバー入りへの瀬戸際の立場〉などの『チーム内の立場』や、〈周囲からの期待〉、〈チームメイトからの期待〉、〈親からの期待〉からなる『周囲からの期待感』、〈チームメイトへの想い〉、〈家族への想い〉、〈周囲への恩返し〉からなる『周囲への想い』や〈家族の支援〉からなる『家族からのサポート』、また、兄弟関係からの〈兄の経験との同一視〉、〈兄の経験への対抗意識〉からなる『兄弟の影響』などから構成される【指導者以外の他者との影響】は、他者との関係が動機に影響を及ぼす要因としてリスクテイキング行動に関わる可能性が示唆される。

4.3 時間的要因

受傷して〈大会までの短い期間〉からなる『大会までの期間』という時間的制約が起因となったことから、【大会までの時間】は、リスクテイキング行動を促す要因になり得ることが示唆される。

本論で明らかになった要因と、Wiese-Bjornstal & Smith (1998) 「スポーツ傷害とリハビリ過程の心理的反応の統合モデル」を検討したところ、受傷選手に及ぼす心理的影響と社会的背景が、スポーツにおけるリスクテイキング行動に影響を及ぼす可能性があることが示唆される。また、芳賀 (1999) の「リスクテイキングに至るプロセス」を検討したところ、産業事故におけるリスクテイキング分野の研究と、スポーツにおけるリスクテイキング行動に関わる要因の共通性があることが示唆される。更に、蓮花 (2000) の「リスク回避行動の心理的過程モデル」を検討したところ、産業事故におけるリスクテイキング分野の研究と、スポーツにおけるリスクテイキング行動に関わる「リスクの認知」と「ベネフィット」の相対性や共通性があることが示唆される。

5 結論

本論では、インタビューをもとに質的研究手法 (KJ法) を用いて、横断的な要因抽出を試みた。その結果、個人的要因、対人的要因、時間的要因が怪我をおしてまで試合に出場する要因となることが明らかになった。スポーツにおけるリスクテイキング行動へのアプローチは、これまでのスポーツ傷害研究領域にはなかった試みである。本論の成果として、今後の育成年代における新たな知見となり、より良いスポーツ現場のための貢献につながるものになり得ると考えられる。